〔一〕 次の―線のカタカナを漢字になおしなさい。

1 コウソウビルが建つ。
2 紅茶にサトウを入れる。
3 円のチョッケイを計る。
4 フクザツな図形をかく。
5 たんぽぽのワタゲが飛ぶ。
6 ユウビンキョクで切手を買う。
7 人気歌手が芸能界をシリゾく。
8 大雪のためリンジ休校になる。
9 地図で日本のサンミャクを調べる。
10 話のスジミチを立てて説明をする。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今の日本の子どもたちは、「勉強をする自由」と言われてもピンとこないかもしれません。

「ゲームなんかしないで勉強をしろ」と言われることはあっても、「勉強をするな」なんて言われることはあまりないでしょう。勉強しないでいいならどんなに楽しいだろう、と思っている子どもはいるかもしれませんが、「学校なんか行かずに働け」と言われたらどうなるでしょう、想像してみてください。

でも、(1)世界には学校へ行きたくても行けない、勉強がしたくてもできない国はたくさんあります。それどころか、「勉強をしたい」と言っただけで、銃で撃たれてしまった子どももいます。

パキスタンという国では、地方の貧しい村に行くと今でも文字を読めない人がたくさんいます。貧乏だから子どもでも労働力とみなされ、小学校にも通えません。［ A ］大人になっても文字を読めない人がいるのです。そうすると、いい仕事にもつけないので、いつまでたっても貧乏な暮らしから抜け出せません。そのような人が多い村では、人々は狭い考えや習慣から抜け出すことができず、新しい仕事も生まれません。村全体が貧しいままです。無知と貧しさでだれもが疲れ果てたそんな村に、武装したタリバンという過激派のグループが入ってきて、支配するようになりました。過激派のリーダーは古い考え方や偏見で人々をしばり、子どもを兵士に仕立ててテロを起こすこともあります。

十分な教育を受けて、自分で考えることができる知恵を持っている人々なら決して受け入れることのできないようなことを強制することもあります。［ B ］女性への教育を禁止することもそのひとつです。女の子は学校など行かずに、家の中で家事をしていればいいのだと言うのです。

昔の話ではありません。今でもタリバンは女子教育に反対して、あちこちでテロを起こしています。その過激派に襲撃された女の子がマララ・ユスフザイさんです。彼女は父親の経営する学校に通っていました。その学校はすべての子どもたちに教育を与えることの大切さを訴えていた学校なので、以前から過激派の武装組織から狙われていました。学校でたくさん勉強したマララさんは、女の子にも勉強は必要だ、とブログにつづり「私には教育を受ける権利がある」と堂々と主張していました。当然ですが、その主張はだんだん多くの人の共感を得るようになりました。

そうなるとマララさんの影響力を恐れたタリバンに、ますます狙われるようになりました。そしてマララさんが十五歳の時、スクールバスに乗っていたところを襲撃され、首と頭に銃撃を受けました。

頭を狙ったのですから、それは脅すためではなく彼女を殺そうとしたのです。しかしマララさんは、軍の病院に運ばれて命を取り留めました。それでもまだ命を狙われる危険があったので、安全のためにイギリスの病院に運ばれて、残っていた弾を摘出する手術を受け、リハビリを続け、奇跡的に助かりました。

そんな目にあったら、普通の人間なら怖くて何も発言できなくなるかもしれません。でもマララさんは暴力に(a)ひるまず、教育の大切さを今も訴え続けています。

十六歳になったとき、彼女は国連で演説をしました。そこで彼女がした演説がとても立派で、世界中の人々を感動させました。

「自分を撃ったタリバン兵士を私は憎みません。(2)もしその兵士が目の前にいて、私が銃を手にしていたとしても、私は彼を撃たないでしょう。なぜなら銃よりも本とペンのほうが強いからです。タリバンが恐れているのは教育の力です。女性の声です。彼らは教育がもたらそうとした自由や平等を恐れるから、学校を破壊するのです」そして、(3)「自分を撃ったタリバンの息子や娘たちにこそ、教育が必要だ」と言い切りました。

その通りだと思います。

もし彼女が銃で復讐をしたら、今度はその兵士の仲間や家族が、殺した彼女を憎むでしょう。そして憎しみと暴力の連鎖はいつまでも続きます。相手の身になって考えるということができなければ、復讐の連鎖を断ち切ることはできません。それには想像力というものが必要です。

想像力というのは、自分と自分のまわりのことだけでなく、広い世界を知ろうとすることです。世界にはいろいろな考え方の人がいます。自分と違う考えであっても、その人の身になってそれを理解しようとすることです。その力を養うのが勉強なのです。

彼女を撃ったタリバンの兵士は、彼女を殺すことが悪いことだと思っていなかったかもしれません。きちんとした教育を受けずに、偏った思想と偏見と暴力に囲まれて育った人は、自分たちだけが正しいと思いこみ、人を殺すことに何も感じなくなるのです。マララさんが自分を撃った兵士を許す、と言えたのは彼女のほうがタリバン兵士よりも強いからです。その強さは彼女が教育を受け、勉強することで得た強さです。

戦いや差別の原因はさまざまですが、同じ人類が人種や宗教や狭い土地の奪い合いで戦うことが、どんなに小さく愚かなことかに思いいたるはずです。

そうは言っても、もし自分が家を奪われたり、家族や親類や友だちを殺されたりしたら、その悔しさ、悲しみ、そして憎しみは「[　　]こと」なんてとても言えません。だから相手に復讐したくなる気持ちはだれにだってあるでしょう。でもその気持ちのままに、復讐をしたとしたら、今度はその相手だって同じようにやり返したくなります。この憎しみと復讐の連鎖が延々とつながって、大きな戦争となってしまうのです。戦いをやめて、憎しみの連鎖を断ち切る……それは口で言うほどかんたんなことではありません。

ジェニン難民キャンプというところに、アハメド・ハティブくんという十二歳の男の子が住んでいました。よく遊び、勉強もできる、とてもよい子でした。

その日アハメドくんは、お父さんにお小づかいをもらって買い物に出かけました。ところがその途中で、突然イスラエル兵に撃たれてしまいました。たった十二歳のアハメドくんが何もしていないのに突然、腹と頭に二発の銃弾を受けたのです。アハメドくんはすぐに近くの病院に運ばれましたが、そこの病院では手に負えないほどの重傷でした。そこでもっと設備の整ったイスラエルの病院に運ばれました。お父さんはアハメドを助けてくれるなら、敵の病院でも何でもいいと思ったのです。

[　C　]、頭を撃たれたアハメドくんを助けることはイスラエルの病院でもできませんでした。回復が見込めない脳死と診断されましたが、心臓はまだ動いていました。アハメドくんの命を救おうと手を尽くしたイスラエル人の医師は、お父さんに「残念ながらアハメドくんはもう助かりません」と伝えました。それから申し訳なさそうにこんなことを言ったのです。

「この国には重い病気で苦しんでいる子どもがたくさんいます。その人たちは臓器移植以外に助ける方法がありません。その子たちにアハメドくんの臓器を移植させてもらえないでしょうか」

息子の臓器はイスラエル人に移植されるかもしれないと言うのです。お父さんにしてみればとんでもない話ですね。息子を殺した敵側の人間に、その子の臓器をあげるなんて、承服できるわけがありません。

ところがアハメドくんのお父さんは、そのつらい気持ちや迷いを振り切って、最後にはイスラエルの医師の申し出を承諾しました。そしてアハメドくんの肝臓や腎臓、心臓などの臓器は六人のイスラエル人に移植

されました。その結果、そのうち五人の子どもたちの命を救うことができたのです。お父さんがいちばん迷っていた心臓は、イスラエル人の十二歳の少女に移植されました。

事件から五年たってぼくはやっと、日本から会いに行くことができました。アハメドくんのお父さんに会ってどうしても訊きたかったことを、まず訊いてみました。

「息子を殺した国の人に息子の臓器をあげるなんて、ぼくだったらとてもできないと思います。どうして決断できたのですか？」

そのぼくの問いに、アハメドくんのお父さんはこう答えました。

「海でおぼれている人がいたら、泳げる人は海に飛び込む。そして、助けようとする。人間として当たり前の行為です。目の前でおぼれている人に向かって、あなたの国籍はどこ？　宗教は何？　などと訊く人がいますか。助けを求めている人がいれば手を差し伸べるのが当たり前です」

おだやかに、悲しげにほほ笑みながら、お父さんはぼくに言いました。ぼくはどうしてもアハメドくんのお父さんを、心臓を移植された女の子に会わせたくなりました。

心臓を移植された時十二歳だった女の子は、もう十七歳になっていました。移植する前は友だちと遊ぶことも階段を上ることさえできず、長くは生きられないと思われていたのですが、今ではすっかり元気になり、彼女は大学の看護学部をめざして勉強していました。アハメドくんのお父さんは少女を見て、「アハメドの心臓がこの子の中で動いているなんて不思議です。まるでアハメドがまだ生きているような気がします」と言いました。それを聞いた少女もアハメドくんのお父さんを「あなたは二番目のお父さんです」と呼んでお礼を言いました。少女の家族も感謝の涙を流し、アハメドくんのお父さんと抱き合いました。そして、「国と国は戦争をしていますが、私たちは家族です」と言ったのです。

ぼくは少女に、将来はどんな人になりたいの？　と訊きました。

「子どもたちを助ける仕事をして、イスラエルとパレスチナの平和のために働きたい。だから医療の道をめざしています」と彼女は答えました。アハメド君は死んでしまったけれど、その心臓は少女に引き継がれ、敵対する国のふたつの家族を結びつけました。

(4)こんな善意のリレーが、もつれ合った憎しみの連鎖をひとつずつ断ち切って、いつかこの国に平和が訪れてほしいと(b)祈らずにはいられません。今の日本には戦争はありません。でも小さないさかいや、いじめや差別があちこちで見られます。今の日本に育つきみたちには自由があります。しかしその自由の意味をわかっていますか？　好きなゲームをする自由、好きなだけテレビを見る自由、好きな子と遊ぶ自由。それだけですか？

自分のことだけを考えて、他人の自由を尊重できなければ、それは自由ではなくて「自分勝手」というものです。大切なのは自分以外の人に対する想像力です。こういうことをされたらどういう気持ちになるだろう、と少しでも相手の心を想像したら、人をいじめることがどんなにひどいことかわかるはずです。

自由を守るためには、まず自分自身をコントロールする強さを持たなくてはいけないと、ぼくは思います。自分の中にあるイライラ、モヤモヤしたものを発散するために、人をいじめたり、差別したり、孤立させたりしていませんか？　人をいじめているその人こそ、(5)自分の中にいるケモノに支配されている、弱い人なのだということを知りましょう。なんとなくあの子が目立つのがシャクにさわる、いやなことを言われた……、些細なことでちょっと悪口を言ってみたくなって、最初はおもしろ半分に始めたのかもしれません。

でもそのうちにだんだん歯止めが利かなくなって止まらなくなり、ほかの人を巻きこみクラスに広がり、始めた自分にさえ止められないほどに、それは大きな「悪」に変わっていくのです。

太古の昔から生き抜いてきた生き物である私たち人類の心の中には、うんと奥のほうにケモノが潜んでいます。

「人を押しのけてでも自分が生き残りたい」

「自分だけがおいしい物をおなかいっぱい食べたい」

「相手の住んでいる場所が豊かだから取りあげて自分のものにしたい」

「自分が強いことを見せるために弱い者をいじめたい」

……ケモノが心の片すみにいるのです。

そんなことがいけないことだというのは、みんなわかっています。そういうことをして、いいことはひとつもない、ということも頭では理解しています。でも残念ながらだれの心にも暗い感情が眠っているかもしれません。

ぼくの心の中にもありました。それが爆発して表に出てきたこともありました。けれどもそれは、人間ではないケモノの心です。人間だって、太古の昔からケモノとして生きてきたことを考えれば、そういう本能が潜んでいても当たり前かもしれません。でもそれと同じくらい古くから、人はそれだけでは生きていけないことを知っていました。そしてそういう心をなんとかして抑えて、助け合うという仕組みをつくり、協力し、弱い者を助けるやさしさを育ててきました。それが人間にしかない大きな脳で考えて得た偉大な方法なのです。

心の奥に潜んだケモノに支配されるのではなく、自分が人間としてそれをコントロールできるようにすることが、大人になるためのいちばん大切な勉強だと、ぼくは思うのです。

（鎌田　實『未来を生きるきみたちへ』）

問一　本文中の［　A　］～［　C　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア　例えば　　イ　しかし　　ウ　だから
エ　つまり　　オ　なぜなら　　カ　あるいは

問二　――線(a)「ひるまず」・(b)「いさかい」の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「ひるまず」
ア　逆らうことなく
イ　賛成することなく
ウ　あわてることなく
エ　くじけることなく
オ　立ち向かうことなく

(b)「いさかい」
ア　誤解
イ　嫌がらせ
ウ　すれ違い
エ　ごまかし
オ　言い争い

問三　――線(1)「世界には学校へ行きたくても行けない、勉強がしたくてもできない国はたくさんあります」とありますが、どうして「学校へ行きたくても行けない」のですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　学校が全て壊されてしまっているから。
イ　通学途中でテロにあう可能性があるから。
ウ　子どもも働かなくてはならないほど貧しいから。
エ　勉強をしなければどんなにいいだろうと思っているから。
オ　文字の読めない大人ばかりで勉強を教える人がいないから。

問四　――線(2)「もしその兵士が目の前にいて、私が銃を手にしていたとしても、私は彼を撃たないでしょう」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　銃をうまく使える自信がないから。
イ　自分が背負う罪の重さにたえられないから。
ウ　自分を撃った兵士をつきとめることは難しいから。
エ　復讐したとしても自分の受けた傷は治らないから。
オ　憎しみと暴力はまた新しい憎しみや暴力を生むだけだから。

問五　――線(3)「自分を撃ったタリバンの息子や娘たちにこそ、教育が必要だ」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　勉強をすることによって、偏見にしばられずに相手の身になって考える力を養うことができるから。

イ　世界中の全ての人たちが同じ思想を持てば、戦いや差別をなくすことができるから。

ウ　自分たちよりも、タリバンの子どものほうがより一層貧しい生活をしているから。

エ　他人に言われるよりも、自分の子どもに言われた方が罪の重さを実感するから。

オ　頭の固い大人たちを教育しようとしても、むだになるだけだから。

問六　本文中の［　　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　大きな　　イ　小さな　　ウ　大切な

エ　正しい　　オ　新しい

問七　――線(4)「善意のリレー」とありますが、それはどのようなことですか。次の文の［　　］にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、Xは二十文字、Yは十文字でそれぞれ答えなさい。ただし、Xは初めと終わりの三文字を答えること。

「［　X　］のが当たり前」と考える父が、つらい気持ちを乗りこえて敵側の少女の命を救ったことで、少女も［　Y　］と考えるようになったということ。

問八　――線(5)「自分の中にいるケモノに支配されている、弱い人なのだということを知りましょう」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

①「ケモノに支配されている」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　全てを暴力で解決しようとすること。

イ　自分の欲望に振り回されているということ。

ウ　強い者の言いなりになってしまうということ。

エ　武装組織のリーダーを夢見ているということ。

オ　勉強をしたくないという思いにかられていること。

②　ケモノに支配されないようにするには、どのようにすればよいのですか。わかりやすく説明しなさい。

問九　勉強をすることでどのような力がつくと筆者は考えていますか。本文全体をふまえて、わかりやすく説明しなさい。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大会終了後、マスコミが囲んだのは優勝した斉藤選手だった。

さつきはのびのびと飛んで、三位に食い込んだ。さつきにもインタビューアーが群がった。甲斐選手は五位だった。彼女は転倒を乗り越えて、着々とまた実力をつけつつある。

理子は七位だった。

表彰台を逃したどころか、初めてさつきと甲斐選手に公式試合で負けた。二本とも、やはり踏み切りが上手くいかなかった。着地で乱れ、なにより飛距離があまりに伸びなかった。

（私がいない表彰式）

理子は人目を避けるように、ブレーキングトラック横にある施設の、非常階段の踊り場から、栄光を手にした選手らを見つめた。

表彰式を取り巻く人々の中には、智子もいるだろうと理子は思った。

（表彰式を外から見るのは、たぶん、初めて試合に参加したシーズン以来だ）

ジャンプを始めたての、まだ子どもの時分だったから、悔しさを胸に抱えてそれを見たという記憶はない。

（ジャンプをやるようになって、こんなに辛い思いをしたこと、今まであったかな）

カップを受け取る三人の選手の像が、理子の目に浮かぶものでゆがんだ。

（さつきに負けてしまった）

——私は待たないよ。

待ったつもりなんて一つもなかった。いつだって自分のできる限りの努力はしてきた。さつきに図抜けた天分があるのは、わかっていた。信じられないスピードで伸びていく姿を目の当たりにして、やがて確信した。

（いつか、こんな日が来るかもしれないとは思っていた）

でも、こんなに早く来るとは思っていなかった。

自分がこんなふうに、無残に崩れてしまうとも。

（どうして、誘ってしまったんだろう）

(2) さつきさえ、あの表彰式の場にいなければ、ここまで悔しくない気がした。ここまで情けなく、いたたまれない気分にさいなまれないだろうと思った。

（負けるって）

(a) 手のひらを返し、自分に見向きもしなくなった報道の人たち。

勝たなければおまえにはなんの価値もないのだと、そうあざけられている気がした。

（負けるって、こんなに辛いことだったんだ）

理子は濡れた頬を手のひらで拭った。

（せめて、さつきには笑っておめでとうって言おう。それこそ、いつもさつきが私に言ってくれていたように）

さつきに祝福の言葉をかける心の準備をするために、表彰式に背を向けて非常階段を降り、施設の陰に隠れて座り、目をつぶった。

「それじゃあ、最後にこれからの目標を教えてください」

半年前なら、理子に向けられていたレコーダーが、自分に差し出されている。

「冬のシーズンも大いに期待しています。頑張って」

記者は最後にそう言って笑った。

初めて理子よりも上の台に上ってからというもの、大会に出るたびに、いやその前日の練習から、さつきは多くの視線を感じるようになった。

（私自身はなにも変わっていないのに）

同じように飛んでいるだけなのに、それこそ理子が常にトップで、さつきがその二つ三つ下にいたときと、これっぽっちも変わっていないつもりなのに。

期待していると言われると、どうして、と思ってしまう。

夏の間、「期待」という言葉をかけられた回数は、たぶん理子よりさつきのほうが多い。

(3) 今まで弾よけの後ろで楽しく自由に飛んでいたのに、急になんの前触れもなく、その弾よけが撤去された感じだった。真っ向から吹きつけてくる「期待」という名の圧力に、さつきは戸惑い、居心地の悪いものを感じてしまう。

今日終えた夏のシーズン最後の大会——代表クラスの選手は不参加だが、高校生や大学生、社会人もエントリーしていた——でも、さつきは

理子を上回り、二位として表彰台に上った。理子は九位だった。

（理子、大丈夫かな）

さつきは理子を超えたとは思っていなかった。自分はいつものように飛んでいるだけのつもりだったからだ。けれども、結果はやっぱり面白いくらいさつきについてきた。そして唐突に崩れたように見える理子の調子は、最後の大会でも戻らないままだった。

（ジュニア代表の合宿から戻ってきて、ずっと……）

理子はあまりしゃべらなくなっていた。さつきが「私で良かったら相談に乗る」と心配しても、力なく笑って首を横に振るだけだ。

あんなに理子を持ちあげて、期待していたくせに、大会で勝てないようになると、マスコミの人たちはてきめんに手のひらを返す。

『ジュニア代表の小山内選手は飛距離が伸びず、表彰台を逃した。』

『小山内選手は七位に終わった。』

そっけなく、流すように結果だけを報じる。まったく触れられないことだってある。

沢北町へ帰るマイクロバスの中で、理子は静かだった。窓際の席で、ずっと窓の外の景色を見ていた。

——今日のジャンプも良かったよ。

——さつき、二位おめでとう。

いつもと変わらぬように、控室で理子はさつきを称えてくれた。

でも、それ以降はすっかり黙ってしまった。

車の中でも、隣のさつきを振り向かない。

理子の横顔からは、彼女がなにを考えているのかつかめなかった。

夏休みが明けたその日、理子は練習に来なかった。

次の日も。また次の日も。

「理子、どうして練習に来ないの？」

三日練習を休んだ理子に、さつきは翌日登校してすぐ尋ねた。「なんで？　えっと、どこか痛いの？　怪我でもした？」

（そうじゃないことはわかっているんだけど）

(4) 理子は大人びた微笑みを浮かべて、ゆっくりかぶりを振った。

「怪我なんてしていないよ。心配しないで」

言葉のとおり、理子はその日時間割に組まれていた体育を、普通にこなした。マットの上で体育教師の指名を受け、お手本としてきれいに側転する理子の体は、しなやかで柔軟だった。

「小山内さんってさ……」

端っこの方から低いささやき声が聞こえた。

「なんか今、ジャンプ全然駄目なんでしょ？」

自分のことを言われているかのように、さつきの頭の中が一瞬振動した。

「春はジュニアの日本代表に選ばれたって、新聞に出ていたのにね」

「合宿とかも行ってたよね」

「なのに、帰ってきた大会じゃ全然だったんでしょ？　お父さんが言っ

てた」
「町の大人はみんな、小山内さんのこと才能があるとか言ってたのにね。将来はオリンピック選手だとか」
「正直、ちやほやされ過ぎてたと思う。小山内さんもその気になってたんじゃない？」
いいきみってかんじ。
さつきはささやき声のほうを、思わず睨みつけた。そこには、クラスの中でも取り立てて目立たない、どうということのない女の子が三人いた。彼女たちはさつきの視線を受けて、そらとぼけたようにそっぽを向いた。
その子たちとは違う一人が、さつきに話しかけてきた。
「そういえば室井さん、すごいね。夏休みの大会は、小山内さんより成績良かったんでしょう？」
それはそのとおりなのだが、さつきはなんとなく肯定できなかった。でもその子はさつきの反応など気にもとめない様子で、こっそりとこう言った。
「小山内さんは、私は他の子とは違うって感じで、ちょっと近寄りがたかったけど、室井さんなら応援できるな」
（なにそれ。どういうこと？）
側転の次に、倒立からの前転をやらされたとき、理子は倒立でややふらついた。悪口をささやいていた女の子たちが、くすくす笑った。戻ってきた理子は、さつきと微妙な距離を置いた場所に立った。さつきはすかさずその距離を詰めた。
「ねえ……今日は練習に来るでしょ？」
理子は穏やかな顔をしていたけれど、さつきを見なかった。
食後にお茶を飲んで、お風呂の準備に行きかけた理子を、智子は呼びとめた。
「理子。あんた、ジャンプをやめるかい？」
理子が立ち止まる。でも言葉はなかった。智子は構わず、続けた。
(5)「あんたの好きにするといいよ」
ようやく、理子がゆっくりと顔を智子のほうへ向けた。そんな娘に、智子は笑いかけた。
「あんたがもうジャンプを続けるのが嫌で、どうしても耐えられないなら、やめてしまいなさい。町の人やコーチ、マスコミ、スキー連盟の人になんて言われても、お父さんとお母さんが守ってあげるから」
理子の眉がちょっとひそめられ、視線が下に落ちた。
「お母さんはね、ちっちゃなあんたがジャンプをやり始めたときから、いつやめてもいいと思っていたよ。でもね、あんたはとっても楽しそうだった。だから、応援してたの。理子がすごいとか、将来のオリンピック選手だとか、褒められるからじゃないの。あんたの価値はそれだけじゃないんだから。お母さんはね、あんたが楽しそうに笑っているのを見るだけで、それだけでよかったんだから」
理子がうつむいたまま、視線だけを上げる。
「お母さん……」
声は心なしか震えているように聞こえた。「お母さんは、ジャンプをやらない私は嫌いじゃない？」
「バカね。嫌いなわけないでしょう。さつきちゃんのお母さんだって言っていたよ。ジャンプが一番じゃなくても、転校生だったさつきと仲良くしてくれた理子ちゃんがとても好きだし、ありがたいって感謝しているって。ねえ、理子。あんたも考えてごらん？　ジャンプ少年団にはあんたにかなわない選手がいっぱいいるよね。あんたの今の調子のことはよそに置いておいて。ね、いるでしょう？」
「……いたかもしれない」
「あんたに勝てない、大会でも表彰台に上がれない子のことを、あんたはなんの価値もない子だと思っていた？」
理子はすぐさま答えた。「思ってない」
「そうでしょう？　同じことだよ。ジャンプの才能があって、全日本ジュニア代表にも選ばれる、お母さん、誇りに思った。誰もができることじゃないからね。でも、それだけが理子の全部じゃない。あんたがたとえこの先一度も勝てないとしても、少なくともお母さんとお父さんは、あんたに価値がないなんて絶対に思わないの」
「……」
「それにしても、あんたは幸せもんだね」
「……え？」
「あんたのことをこんなに心配して、いろいろ駆けずり回ってくれる、さつきちゃんっていう友達がいるんだから。スランプにならなかったら、この幸せはわからなかったかもしれないね」
理子は一度顔をこわばらせてから、くるりと背を向けた。
「お母さんが言いたいのはこれだけ。さあ、お風呂に入っちゃいなさい」
理子は、リビングを出ていった。
智子は理子が立っていたフローリングの床に、透明な滴が落ちているのを見つけて、そっと拭き取った。
日暮れは一時期に比べて、格段に早くなっている。西の空は橙と茜と金が入り混じって、たなびく雲が光に縁どられている。
小麦畑のほうから風が吹いてくる。さつきはその中にちょっぴりだけだが、夏の終わりの匂いを嗅ぎとった。
「私、歩いて帰ろうかと思っているんだけれど、平気？」
さつきは、「平気」と胸を張った。
「私ね。お母さんと話して、ジャンプを始めたころのことを、思い出せた」
軽トラックが対向車線をかけぬけていく。
「そのころの理子、見たかったな」
本心を打ち明けると、理子は肩を竦めてにこっとした。「どうして？」

「かわいかったんじゃないかなって」
理子は面食らった表情をしてから、今度は声を出して笑った。
「同じだったと思うよ、少年団にいるその年頃の子たちと」
「そうかあ。じゃあ、やっぱり楽しかったんだね」
「うん、そうだね」
「理子のお母さん、言ってた。私が入団した日、すごく嬉しそうに帰ってきたって……私それを聞いて、飛んじゃいそうに嬉しかった」
「……うん。実際、嬉しかったもの」
刈り取りを終えた小麦畑には、転々と巨大なロールケーキみたいな麦の束がある。
「さつきが入ってくれて、嬉しかった。怖がっているのに背中を押したのは、ちょっと悪かったかなって思っているけど、すぐに楽しかったって言ってくれて、本当に……。その日のうちに何度も飛んでいるのを見て、この子と一緒に飛べたら楽しいだろうなって、心から思った。でも」
ごめんねと、一言前置きをして、理子は静かに言った。
「[redacted]思ったことも、あるんだ」
理子の涼しげな目がまっすぐにさつきに突き刺さってくる。
「さつきがあまりにも楽々と飛んで、どんどんうまく、強くなっていくから。いつか追い抜かされるって、焦って、怖くて。負けるのが、怖くて」
さつきさえ誘わなければ、こんな思いをしなくてすんだのに――そう後悔してしまうこともあったのだと、理子は告げた。

「実際、もう負けちゃったし」
一瞬だけ逸らした理子の眼差しは、かすかな悲しみの色を帯びていた。
「でもね」理子はまた視線を戻した。「それでも私、さつきのジャンプ、好きだよ」
「理子……」
「ジャンプって、スタートから接地まで神経をいっぱい使って、ほんの何秒かの間にたくさんのことをしなくちゃいけないのに、さつきはすごく自然にそれをやっているみたいで、まるで、風を友達にして運んでもらっているように見えるの。空中姿勢も私よりいいし」
すごく自由な姿だと、理子は唇をほころばせた。
「だから、大好き」
さつきは理子の、鞄を持っていない空いている手をきゅっと握った。
「私も理子のジャンプ、大好きだよ。きれいで……本当にきれいで。最初からずっとそう思ってた」
「ありがとう」
「また、見たいの。一緒に飛びたい」
風になびく髪の毛をそっと押さえた理子に、さつきは訴える。「私は理子のすごさがわかる。誰よりわかる。サマージャンプでは、私は理子より確かに飛んだけど、でも理子に勝ったとは、思ってない」
「どうして？」
「だって、足を骨折しているボルトに勝ったって、誰も私のほうが足

が速いなんて思わないでしょ？」
理子は苦笑した。「なにそれ？」
「斉藤さんだって、不調になるとしても、それは一時的なものって言ったんだよね？　だったら絶対また飛べるよ」
「絶対なんてことはないよ。もしかしたらこのままかもしれない。誰も保証も約束もしてくれない」
「約束がなかったら、だめなの？」
さつきは立ち止まった。さつきに手を握られている理子も、足を止める。
「一番最初にジャンプしたときは、なんの約束もなかったでしょ？　理子は誰かに、あなたはすごい選手になる、ずっと勝ち続ける、将来はオリンピック選手になるって約束されたから、ジャンプを始めたわけじゃないよね？」
理子に伝えたいことが心の中でいっぱいになって、さつきはどういう言葉でそれらを表現していいのかわからない。だからせめてとばかりに、(6)握る手に力を込める。
「理子も最初飛べなくて、永井コーチに背中押されたんだよね。それからどうしてジャンプ続けようって思ったの？」
痛いと言われるかもしれなかったけれど、さつきは握る力を緩められなかった。
「ただ単純に好きになったからじゃないの？　楽しかったからじゃないの？　私はそうだったよ。勝つのも嬉しいけど、それよりもなによりも、私はジャンプが好きで、理子と一緒に飛ぶのが楽しいから飛んでるよ」
「さつき……」
「負けるのって嫌なことだっていうのはわかるよ。理子の本当の悔しさとか、辛さとか、そういうのはなにからなにまでわかってないかもしれないけど、いい気分じゃないことくらいはわかる。でも、それは全部を消しちゃうものなのかな。楽しさや嬉しさも全部消えちゃうの？」
低い山際に落ちるぎりぎり手前の夕日が、理子の顔を横から照らして、その瞳の色を薄く透けさせる。
「私、もう一度理子と飛びたい。理子だって心のどこかでは、このままやめたくないって思っているよね？　お母さんから聞いたの。理子、昨日お母さんが勧めたお菓子を食べなかったって。もしやめる気なら、体重とか体型とか、もう気にする必要ないもん。違う？」
理子は微笑んだ。「違わないよ」
「私、理子がいると強くなれる気がするんだ。もっと飛べる気がする。それから……ちゃんと、本当に、理子に勝ちたい。迷っている途中の理子じゃなくて、本当の理子に勝ちたい」
理子は力のある眼差しで、きちんとさつきを見返している。
さつきは思い切って、一番重要な問いを投げかけた。
「理子。ジャンプ、嫌い？」
理子は首を横に振った。

「ううん、大好きだよ」

はっきりと、力強く、理子は断じた。「大丈夫。私、もう答えは出してるの」

(7)理子の手がさつきの手をぎゅっと握り返してきた。

（乾（いぬい） ルカ『向かい風で飛べ！』）

問一　次の登場人物の説明の中から、あてはまらないものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　さつきと智子はジャンプのライバル同士である。

イ　理子は春のジュニア日本代表に選ばれた。

ウ　小山内選手とは理子のことである。

エ　さつきと理子は同じ学年である。

オ　智子は理子の母親である。

問二　――線(1)「カップを受け取る三人の選手の像が、理子の目に浮かぶものでゆがんだ」とありますが、このときの理子の気持ちとして最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　やっとさつきが活躍（かつやく）できるようになったことを、嬉（うれ）しく思っている。

イ　甲斐選手が転倒を乗り越えて表彰台に上ったことに、感動している。

ウ　ジャンプを始めた子どものころを思い出して、情けなく思っている。

エ　自分の母親がすぐになぐさめに来てくれないことを、不安に思っている。

オ　いつも大会で結果を出してきた自分が、表彰台に上れないことを悔しく思っている。

問三　――線(2)「さつきさえ、あの表彰式の場にいなければ、ここまで悔しくない気がした」とありますが、どうしてそのような気持ちになったのですか。簡単に説明しなさい。

問四　――線(a)「手のひらを返し」・(b)「面食らった表情」の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「手のひらを返し」

ア　激しく非難して

イ　他人のふりをして

ウ　急に真面目（まじめ）になって

エ　がらりと態度を変えて

オ　冷静に状況（じょうきょう）を見極（みきわ）めて

(b)「面食らった表情」

ア　いたいたしい表情

イ　うんざりした表情

ウ　うろたえた表情

エ　ほこらしい表情

オ　おびえた表情

問五　――線(3)「今まで弾よけの後ろで楽しく自由に飛んでいたのに、急になんの前触れもなく、その弾よけが撤去された感じだった」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　今までさつきをかばってくれていた理子が、突然冷たくなったということ。

イ　理子や周囲の人に対して、気をつかわずに飛べるようになったということ。

ウ　結果を残したことで、さつきが自信を持って飛べるようになったということ。

エ　さつきが急に、周囲の人たちから結果を求められるようになったということ。

オ　マスコミに注目されたことで、周りから反感を買うようになったということ。

問六　――線(4)「理子は大人びた微笑みを浮かべて、ゆっくりかぶりを振った」とありますが、このときの気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　休んだ理由について、しつこく聞いてくるさつきを振りはらいたいと思う気持ち。

イ　本当はなやんでいることがあるが、それをさつきには相談できないという気持ち。

ウ　さつきの子どものような問いかけによって、救われたような気持ち。

エ　見当ちがいな問いかけをしてきたさつきに対して、あきれる気持ち。

オ　本当は体調が悪いが、周りにそれを知られたくないという気持ち。

問七　――線(5)「あんたの好きにするといいよ」とありますが、このときの智子の気持ちとして最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　せっかく今までジャンプを続けてきたのだから将来オリンピック選手になってほしいという気持ち。

イ　ジャンプだけでなく新しい世界で活躍するきっかけになってほしいという気持ち。

ウ　大会で勝てないのであれば無理に続けなくてもよいのではないかという気持ち。

エ　もう一度理子にジャンプへの意欲を取りもどしてほしいという気持ち。

オ　ジャンプの成績だけが理子の価値を決めるのではないという気持ち。

問八　本文中の［　　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　さつきより私の方がかわいいって

イ　さつきには負けるはずがないって

ウ　さつきを誘わなければ良かったって

エ　さつきにはジャンプの才能がないって

オ　さつきにいじわるするのはやめようって

問九　――線(6)「握る手に力を込める」とありますが、このときのさつきは理子にどのようなことを伝えたかったのですか。次の中から適当なものを二つ選んで、記号で答えなさい。

ア　理子は必ず優勝できるということ。

イ　理子とまた一緒に飛びたいということ。

ウ　不調なのは理子だけではないということ。

エ　サマージャンプ以外では理子に勝てないということ。

オ　ジャンプが好きだという気持ちが大事だということ。

カ　ジャンプをやめるときは一緒にやめようということ。

問十　――線(7)「理子の手がさつきの手をぎゅっと握り返してきた」とありますが、このときの気持ちをわかりやすく説明しなさい。

受験番号	氏　　名

平成27年度　国語解答用紙

※13	※12	※11	※10	※9	※8	※7	※6	※5	※4	※3	※2	※1

〔三〕

問十	問四	問一
	(a)	
	(b)	問二
	問五	問三
	問六	
	問七	
	問八	
	問九	

〔二〕

問九	問八	問七	問五	問一
	②	Y		A
			問六	B
			問七	C
			X	
			初め	
			問二	
			(a)	
			～	
		問八	終わり	
		①		
			(b)	
			問三	
			問四	

〔一〕

6	1
7	2
く	
8	3
9	4
10	5

※欄は何も書かないこと

得点	※